貴チョウな標本海渡る

大分市の故川崎さん収集

オランダの博物館に寄贈

上タイトルはその名も「川崎さんのチョウ」。オランダ国立自然史博物館の展示案内＝同博物館提供 下生前の川崎裕一さん

「パルナシウス」と呼ばれるアゲハチョウの一種の収集家で、2010年11月に57歳で亡くなった大分市の川崎裕一さん＝当時、佐伯建設会長＝の約1万匹の標本が、オランダ・ライデン市の国立自然史博物館に寄贈され、9月1日まで同館の特別企画展示室で公開されている。同博物館の昆虫標本コレクションは質と量で世界で五本の指に入り、パルナシウスについては世界一を誇る。憧れの場所に学術的価値を認められ、川崎さんの生涯の夢が、かなった。

パルナシウスは欧州からヒマラヤ、日本、北米にかけて北半球の高山地帯にすむアゲハチョウ。川崎さんと30年余り親交があった北九州市立いのちのたび博物館の名誉館員、上田恭一郎さん(63)によると、パルナシウスは亜種が多く、新たに発見できる楽しみから世界中に収集家がいる。なかでも川崎さんは日本随一のコレクターであり、研究者でもあった。

川崎さんは、大分上野丘高校から昆虫研究会が知られた慶応大に進み、世界を旅して採集を始めた。祖父が創業した建設会社に勤めて多忙の身となってからは標本の分類研究に力を注ぎ、研究論文集の編集も手がけた。発見した新種に長男力宏さん(29)の名を付け、報告をしたこともある。

力宏さんは「父は『もし自分がいなくなったときはオランダに寄贈し、将来の研究に使ってもらいたい』と常々話していました」と振り返る。オランダ国立自然史博物館には、何度も訪れていたようだという。

急な病で亡くなったあと、力宏さんが遺志を受け継ぎ標本の寄贈が実現した。同博物館には19世紀末から20世紀初頭に築かれたパルナシウスの一大コレクションがある。新発見の亜種などを含む川崎さんの標本は、それ以降100年間の〝空白〟を補完するものだという。オランダ大使館は「川崎さんのおかげで、完全なコレクションになった」と喜ぶ。

力宏さんは「清楚なチョウは、父の表情そのもの。権威ある博物館に生かされ、大喜びしていると思います」。近くオランダを訪れ、再会する。

（南陽子）